

出土資料研究待望の書

―『地下からの贈り物』―

湯浅 邦弘



四六判 386頁
東方書店
[本体 2000円 + 税]

中国出土資料学会編
地下からの贈り物
新出土資料が語るいにしえの中国

三〇年ほど前の出来事である。

私は、修士論文の口頭試問に臨んでいた。日原利国先生、加地伸行先生の試問が終わった後、副査の黒川洋一先生が開口一番、やわらかな京都弁で、こうおっしゃった。「君は、新しいもんずきなんやねえ」。その修論は、睡虎地秦墓竹簡を取り上げたものであったが、好奇心に駆られて新奇な資料を対象にしたという意識はなかったので、意表を突かれ、答えに窮した。

法家思想に興味を抱いて勉強していた私は、先輩方から、それはよしておけと忠告を受けた。大阪大学には、初代教授を務められた木村英一先生の大著『法家思想の研究』があり、これを越えることはできないとされていたからである。この法家思想に限らず、当時、諸子百家の研究は大きな壁にぶつ

かっていた。主要な諸子の文献については、おおむね現代語訳が出揃い、思想の核心についても、それぞれ代表的とされる論文がすでに発表されていた。法家思想についても、『商君書』や『韓非子』を今さら取り上げようと、新しい知見を得られる保証はなかったのである。

ただ、一つの光明と感じられたのは、新出土資料の公開であった。一九七〇年代に発見された銀雀山漢墓竹簡、馬王堆漢墓帛書、睡虎地秦墓竹簡などが八〇年代に入って次々と日本にも紹介され始めていた。古代中国を知るための第一級資料であると感じられた。そこで私は、睡虎地秦墓竹簡を主対象とし、そこに『商君書』や『韓非子』などの伝世文献を絡ませることで、秦の法思想と、その法治の実態を明らかにしたいと考えたのである。

幸いに、修論については一定の評価をいただき、博士後期課程に進学を許された。進学後も、私の研究方針は変わらず、伝世文献に加えて、新出土文献をできるだけ積極的に活用していこうと考えていた。しかし、基本的には孤軍奮闘という有様で、学界の全体的雰囲気として、研究の主対象が伝世文献、とりわけ経書、または資料的に安定している諸子の書、史書、ということには変わりがなかった。出土資料に特化した教科書や参考書などあるはずもなかった。

それから歳月は過ぎ、一九八〇年代の張家山漢簡などの発見を経て、さらに中国学研究にとって大きな画期をなしたのは、一九九三年に発見された郭店楚墓竹簡であろう（全容の公開は九八年）。多くの儒家系文献や『老子』写本を含む新資料が公開されたことにより、新出土資料研究が一気に活況を呈してきたのである。衝撃はそれにとどまらず、その後、上海博物館蔵戰国楚竹書（上博楚簡、清華大学竹簡、北京大学竹簡、岳麓秦簡などが相次いで公開された。新出土資料の国際学会も毎年のように開催され、もはやこれらの新資料を軽視しては、研究そのものが成り立たないという状況に至っている。

ただ、多くの新資料が発見・公開されることによって、情報交通整理が必要となってきたのも事実である。特に、

これから研究の世界に飛び込むとする若手研究者には、何らかの手引きが必要となってきた。

そこに登場したのが、本書である。編者は中国出土資料学会。この学会は、一九九五年四月に中国出土資料研究会として発足し、九八年四月に改称して現在に至っている。それまで、哲学、文学、史学といった伝統的枠組みが強固に守られてきた学术界において、それらを横断し、広く宗教学、考古学、美術史学、古文字学、書道史なども加え、さらに、年三回の例会にも、外国人研究者を招いて発表を要請するなど、異色の学会である。

この学会が総力をあげて編集した本書は、二部構成となっている。第一章として「出土資料でわかること」全二六節、第二章が「どこから何が出てきたか」全二〇節。一人一節担当の分担執筆である。第一章は、言わばテーマ別による解説。出土資料の発見によって、文字、政治、経済、思想、医学、戦争、神話など、広範な領域に新知見がもたらされたことが記される。第二章は、一転して、出土地・出土資料ごとの解説。敦煌・トルファン文書から始まり、最近公開されたばかりの簡牘資料までが紹介される。

ようやく登場した待望の書である。各項目は、それぞれのテーマ・資料に沿って情報が記されるが、そればかりではな

く、項目によっては、将来の展望や研究上の留意点にも言及する。企画立案と原稿整理に当たられた方々の苦勞がしのばれる大作である。

本書は、多くの読者を得て版を重ねることと思われるが、さらに期待したいのは、刊行委員会委員長の小澤正人氏が巻末で書いておられるような「続編」の刊行であろう。出土資料研究は、道まだ半ば、あるいは本格的に始動したばかりだとも言えるからである。何年後かに続編が登場する際には、一読者として、次のようなことをさらに期待したい。

第一は、研究史である。敦煌文書が発見されてから一〇〇年。銀雀山漢墓竹簡・馬王堆漢墓帛書などが発見されてから四〇年。郭店楚簡・上博楚簡が発見されてから二〇年。研究の蓄積は膨大なものがあり、研究の歴史そのものが研究の対象になるのではないかと思われるくらいである。特に、初期の頃に日本人研究者が果たした重要な役割。近年の日中間での、しのぎをけずる研究状況。そこには多くのドラマがある。本書でも、項目によっては多少触れられているものもあるが、総合的に出土資料研究の歴史が記述されてもいいように感じられる。そうすれば、巻末のコラムで富谷至氏が警鐘を鳴らしているような資料の意義、真偽をめぐる問題、それを踏まえた資料の慎重な弁別と活用といった点も、より明ら

かになってくるのではなからうか。

第二は、出土資料研究に果たす電子情報の役割である。郭店楚簡が公開されて以降、武漢大学や復旦大学を拠点として、インターネットを活用した研究成果の公開が進んできた。上博楚簡も現在、分冊方式で刊行が続いているが、一つの分冊が刊行されると、その翌日から、ネット上に次々と論文・札記類が掲載されるという状況に至っている。ただ、そこには功罪があるようにも感じられる。たとえば、論考に対するコメントが次々とペンネームで掲げられ、それをどこまで先行研究として認めるのかという点などは大いに悩ましい問題である。いずれにしても日本の学界は、こうした現状にほとんど対応できていない。情報化時代の研究のあり方として、この点についても言及がほしいところである。

第三は、用語解説である。かつて伝世の版本を研究対象としていた時代には、書誌学の用語について一定の知識が必要とされた。匡郭、首書、版心、魚尾、刊記、識語、題簽、四針眼訂法など、多くの用語を知らないと恥ずかしい思いをしたものである。今は、これに加えて、出土資料に関する用語が加わる。本書でも、用語の解説として冒頭に三ページが当てられているが、やや少ないであろう。最近では、竹簡配列の際の有力な手がかりとなる劃痕・劃線（竹簡背面になめに

引かれたひつかり傷状の線）や契口（竹簡を綴じる際につけられたくさび形の切れ込み）、簡序番号または次序番号（竹簡の背面や文字面に記された配列番号）などが注目されている。簡牘に限っていても、基礎用語は多数あり、これらの用語解説の充実が望まれる。

二〇一四年九月、私たちの研究グループ（中国出土文献研究会）は、甘肅省蘭州の學術調査に赴いた。甘肅省博物館、甘肅省文物考古研究所において、武威漢簡、居延新簡、天水放馬灘秦簡、敦煌馬圈湾簡牘、敦煌懸泉置漢簡、肩水金關漢簡など多数の簡牘資料を実見し、現地研究者と意見交換を行った。その際、これ以外にも、フィールド簡が発見される可能性は高く、極端に言えば、強風が地表の砂を吹き飛ばせば、その下からまた新たな簡牘が見つかるかもしれない、との現

地研究者の言に私たちは思わず吹き出したが、確かに、甘肅省に限ってもみても、出土資料は膨大な数にのぼり、その全容解明には相当の労力を必要とするであろう。こうした現状の中で、本書の登場は、多くの研究者のチャレンジを促すに違いない。本書は、出土資料を「地下からの贈り物」と称するが、実は、本書そのものが、私たちに届けられた貴重な贈り物なのである。

（ゆあさ・くにひろ 大阪大学）

中国人物伝

全4巻

井波律子

（内容案内進呈）

第1回・第I巻

乱世から大帝国へ

春秋戦国—秦・漢

春秋戦国の乱世を彩る名優たちから、秦・漢による全土統一へ。ここに始まる、（人）を通じて読む中国史！

第2回・第II巻

反逆と反骨の精神

三國時代—南北朝

スーパースター続出、群雄割拠の三國時代から、華麗なる貴族たちの魏晉南北朝へ。益々盛り上がる第II巻

第3回・第III巻

大王朝の興亡

隋・唐—宋・元

12月6日発売
12月6日発売
明・清・近現代

第4回・第IV巻

変革と激動の時代

12月6日発売

12月6日発売
12月6日発売
明・清・近現代

関東大震災と中国人
王希天事件を追跡する
「岩波現代文庫」
本体1180円

田原洋

周恩来の親友だった中国人のリーダーはなぜ殺されたのか？証言と史料の発掘によって、その真相に迫る。



岩波書店

（定価は表示価格＋税）

東京都千代田区一ツ橋2-5-5
http://www.iwanami.co.jp/